



宜昌の中国軍兵士
(1940年)

漢川行 (其の三)

予備軍

一週間が過ぎた。船の切符についての情報はまったくなかった。

ずっと待ちつづけていらいらしていた。中央の部屋には各地から徴兵されてきた新兵の一班がいた。裏庭にも一班の兵士たちがいた。床にもテーブルの上にも人がいっぱい寝ていて耐えられほど騒がしく、静寂な時がまったくなくなり、文章を書く気も起らなかった。大家の女主人も息子の嫁もほんのわずかしかな顔を出さず、おばあさんに至ってはほとんど出てこなかった。彼女たちは彼らの汗の臭いがいやだったので、出てくるときは鼻孔を綿で塞いでいた。それに彼女たちが麻雀をする音も聞こえず、小間使いの女たちと一人、二人の男衆、四、五人の子供たちが動いている以外、外に顔を出しているのは私と文姉さんだけだった。

最初は少し不便だと思った。扉の外で上半身裸の男たちが一列に横たわっているのだから。だがとても暑い日に彼らにきちんと服を着てくれと要求することなどできない。彼らはまったく服を着ずに、下着のパンツと破れたチョッキを着ているだけなのだ。彼らはみんな今まで田舎で働いていた農民だったので、とても貧しかったのだ。何日かが過ぎてみんなと顔見知りになると、彼らは不愛想ではないし、とても親しみがもてた。彼らは世界中で最も素朴な人たちだ。彼らは母の懐のようないなかの土地

からこの繁雑な社会に出てきて、敵と戦い国難を救う使命を背負って戦場に向かうのだ。彼らは家を離れ、両親と離れ、妻子を置いてきたのだ。どうしても悲しくなり憂うつになり、恨みごとの一つも言いたくなるものだ！

それに彼らは何の教育も受けたことがない。国家の思想、民族意識についてはほとんど考えたこともない。彼らは今回徴兵されて戦う意味を根本的に理解してはいない。彼らははるか遠くの田舎にいて、戦いの状況さえ知らなかったのだ。このような状況の下で、彼らが兵役を拒絶するのをとがめることなどできようか。だから農村に行き、宣伝活動に力を入れることが緊急に必要とされているのだ。文化活動に従事している友人たちが即刻この問題に気づいて、宣伝活動を強化することを希望している。

兵士たちは、賄賂を取る隣組の役員がたくさんいると教えてくれた。農民はこの戦いの兵役の意味をあまり理解しておらず、兵隊に行くこと断固拒否する者もいる。行かないですむならと彼らはどんなことでもする。賄賂を渡して兵役を免除してもらうか、貧しい者に金を与えて身代わりになってもらう。この身代わりになった者の中には、喜んで応じた者もいるが、そうでない者もいる。家には働き手の男がただ一人しかいないこともある。彼がいなければ収穫もできず畑は荒れるにまかせるしかなくなる。政府の規則ではこのような場合は兵役が免除されるのだが、隣組の役員は規則には従わず必ず出るようにと強制するのだ。それでしばしば軍隊からこっそりと逃げだす事件も起こり、このような現象は農村の生産と軍隊の紀律に重大な影響をもたらしていた。

兵士たちの中にいた一人の十代の若者がこのような状況だった。家には寡婦になった五十歳の母親がいて、一人息子の彼と七歳の妹を一人で育ててくれた。彼が徴兵されたので家には母親と妹が残された。畑は耕作する者がなくてすでに荒れ果て、蓄えの食糧もなく、やがては餓死するしかない。若者はごはんの碗を持つとすぐに目を赤くした。班長が彼を慰め、仲間たちも慰めたが、彼の愁いを取り除くことはできなかった。それで彼はいつも眉間にしわを寄せわずかの笑顔も見せたことがなかった。

ある日私はいろいろな話をして彼を諭した。「思いつめちゃだめよ。理解しなきゃ、国家のために戦うことは故郷と両親を守ることだって。そうしないと、鬼子がいったん来たら家は焼かれ両親は殺されてしまう。それにあなたを引っぱって行って、鬼子のために戦わせるかもしれない。今少しでも早く鬼子を追い払って皆殺しにしなきゃいけない。そしたら故郷に農業ができるのよ。あなたのお母さんもきっと嬉しいはずよ。だって愛国者の息子を持っているんだもの。ねえ、子供じみたことを考えないで。勇敢になるのよ！」こう言って彼の肩をたたいて励ました。

しかし若者は悲しそうに首を横に振った。「いや、もう俺は帰ることはできないでしょう。戦争するんですよ、生きていられると思いますか？」ここまで話すと彼は私を見て、苦笑いをした。

「死ぬのはかまいません。ただおふくろと妹がどうなるか。先生、一人は年寄りで一人は子供です。二人とも生活力がないし、面倒を見てくれる親戚、友人もいません。どうやって暮らしていけると思いますか？ もう自殺しているかもしれません。俺が出てくるときにも、母さんは壁に頭を打ち付けて泣いていました。先生！ いまあなたが言った意味がわかりません。本当に母さんを忘れることができないんです。すごい苦勞をして育てあげてくれたのに、わずかも報いることができないんです。ほんとうに申し訳がたちません。」若者はまた泣いた。私には彼を慰める方法がなかった。実際に彼が悲しくないはずはない。だが、いつか外見だけでなく心も武装した軍人になる日が来れば……。

幸いなことに彼らの小隊長も班長もとても温和で、彼らに対して愛情をもって接し家族のようにしていた。それで彼らは軍隊が厳格で恐ろしいと感じないですんでいる。毎日数回訓話があるが、いつも励ましと慰めのことばを与えている。

「気をつけ」「休め」「左向け左」「右向け右」といった初歩的な軍事訓練もある。「救亡歌①」を教えることにはかなり重点が置かれている。しかし教官でさえ拍子をはっきりとれないし、勉強したことのない農民ばかりだから、歌い始めもばらばらで、まったく格好がとれていない。あとで私が直してやり、それから彼らに教えてやることになった。みんなよく練習したので進歩がとてもはやかった。三日も経たないうちに『最後関頭②』を歌うことができるようになった。中には一句も覚えられないような鈍い者もいたが、彼らは弱みを見せたくないのか、かえって人より大きな声で高らかに歌う。それも本当に無邪気でかわいいものだった。

歌を教える以外に、私は彼らの医者にもなった。彼らが病気にかかったとき、持っていた救急水や仁丹、頭痛薬で手当てをしてやったら良くなったのだ。だから彼らは私に感謝し、親切にしてくれて、少しもばかにした態度を取らなかった。

①救亡歌……満州事変の発端となった日本軍の鉄道爆破事件（柳条湖事件、1931年9月18日）のあと、中国では「救亡歌を歌う運動」が始まり、多くの抗日軍歌が作られて歌われた。

②「最後関頭」……1938年に制作された抗日映画『最後関頭』の中で歌われた歌。
この映画は当時の著名監督たちが合同で製作し、各界の名士たちが前線に持っていき上映されたと言われている。

王班長は二十歳ぐらいの勇敢な戦士で、四川軍に配属されたばかりだった。優しい心と聡明さと軍人の生真面目な性格を併せ持っていた。しかし私がやっているような文明的な治療法には賛成していなかった。

ある時、咳が出て寒気がして熱を出した兵士に、野蛮な治療を施していた。患者の両腕を縄で固く縛り、十本の指先に針を刺し、それから胸を強く摩擦するのだ。

まるで豚を殺すような感じで、患者は大きな叫び声を上げずにはいられない。彼自身も疲れて喘いでいる。私はかたわらでただ汗を流していただけだった。だが少しも病状は良くならなかった！それは彼が人間の生理の常識を知らなかったからで、私はとても心配になった。血液が止まったまま長い時間が経っていたので危険な状態になるかもしれない。しかし彼は納得しないで言った。

「前線ではたくさんの兵士が病気にかかったが、すべてこのようにして完全に治しました。彼だけに効果がないのは、きっと仮病を使っているからでしょう。口実を作って帰りたいんです。こんなことはたくさん見てきました。俺の目をごまかそうとしても無駄です。」

「でも、彼の病気にはあのような治療法は合わないのではありませんか？」と、私は少し不満だった。

「先生！」と彼は厳しい口調で言った。「あなたは優しすぎます。理性的ではありません。前線の軍人の生活を見たことがないでしょう。塹壕の中において冷たい風や雨を受け、あるいは酷暑の厳しい日差しの下、彼らはいつでも病気にかかる可能性があります。でもあなたのように優しい医者や看護師はどこにもいません。それに、いろいろな薬はどこから来るのでしょうか。腕力に訴えて運に任せる治療法以外には方法がないんです。ただ手をこまねいて彼らが死ぬにまかせるのを見ていることはできません。かわいそうに彼らは、最後のひと息まで敵に狙いを定めた銃を下ろそうとしないのです。ああ、俺たち軍人の最大の恥は、死を怖がることなのです！」

ここまで話すと、彼は深く息を吸い込んだ。私は思わず彼に尊敬のまなざしを向け、うなずいた。それから彼は興奮したような口調で病人を励ました。

「お前の病気が本当なのか嘘なのか、そんなことはどっちでもいい。ただお前は辛抱しなければならない。心をしっかり持ち、いつもそんな風に嫌そうな不満げな顔を

してはいけない。若くて力のある者が英雄に学ばないでどうする？ 前線で激しく鬼子と戦うのは、国民としての責任を果たすことだ。長きにわたってその名が伝えられるかもしれない。誰が敬わないことがあるか？」

「班長の話は正しいです！」ふだんから最も活発で楽観的で優秀な若者が大きな声でとつぜん言った。彼は前歯が外に出て上下の唇が閉じられないので、みんなから「暴牙子(バオーズ)」と呼ばれていた。

「男たるもの、いつも勇敢でなければなりません。みんな両親や妻子がいるんです。見る間に鬼子は我々の家の入口まで攻め込んできた。自分たちを救うために兵隊になって敵と戦うべきだ。もっと彼らに侮辱されることになってもいいのか、亡国の民になることを甘んじて受けるというのか？」

ひとしきり熱烈な拍手が起こり、暴牙子は恥ずかしくなってきたり悪そうに自分のいたところに戻った。そして楽譜で顔を隠し一人で低い声で歌いはじめた。班長はみんなに、彼は最良の模範だと褒めた。そして彼等の歌を先導し、それから教練をした。それでみんなが目を覚まし元気づけられた。

ただ少数の者がまだ元気ではなかった。あの若者は依然として気が塞いだままだった。彼らのことが心配なので小隊長は表門に鍵をかけ、裏門だけを通行可能にした。ふだん彼らは一步も自由行動を許されていなかった。用を足しに行くのさえ監視付きだった。夜になると、兵士たちが隙に乗じて脱走するのを怖れて正副班長が交互に徹夜で見張りをしていた。

特に隣に滞在している第二班ではすでに三名の新兵が逃げているために、第一班の二人の班長はとりわけ厳しくしないわけにはいかなかった。私も巻き添えを食った。もともと表玄関を出てお湯を買いに行けたのだが、いまは路地を二回曲がって行かなければならないので歩く距離が増えた。それで王班長は私が瓶を持って出ていくのを見るとすぐに謝罪した。「申し訳ない、大変な思いをさせてしまって！」

彼らは毎日夜明けとともに起き、歌を歌い教練して、朝食を食べてやっと少し静かになる。しかし、その日は様子が変わっていた。ちょうど三時、東の空はまだ明るくなっていないのに、私は鞭の音と叫び声に驚いて目を覚ました。

「何があったの？」私は少し怯えて緊張した。「だれか打たれているみたい！」と文姉さんが言った。

「バシッ！バシッ！」「あー！あー！」

「聞いてこなきゃ！」私は我慢できなかった。「だめよ、軍隊の規律は厳しいのよ。ほかの人が干渉するのはよくないの」文姉さんは私を止めた。鞭の音が止まり、続い

て王班長の叱っていることばがはっきりと聞こえてきた。「よく聞くんだ。お前はわざわざ自業自得なことをやったんだ、そう思わないか。逃げるんだったら日本へ逃げていけ。中国にいるうちは中国人が果たすべき義務を果たさなきゃならん！ 前線に行ったら鬼子たちと戦いたくないのなら、売国奴とたいして違わない。こんな人間たちには厳しく対処しなきゃならんのだ！ 副班長、引っぱって行って銃殺刑にしろ！」これを聞いて私は驚いて飛び上がった。しかし口をはさみに行くことはできない。それに、私にはすでに分かっていた。これは脱走兵に対する懲罰の話なのだ。

「あの男の子じゃないだろうか？」と私は独り言を言った。

「班長、許してください！ 女房をもらったばかりなんです。ずっと心配していたんです。もう覚悟ができました。前線に行ったら鬼子を打ちます。お願いします、過ちを悔い改める機会をください。もしもまたやったら、そのときに銃殺しても遅くないでしょう！」麻子(マーズ)だった。彼はまったく目立たない存在だったのに、どうして突然脱走したのだろうか？ 私には分からなかった。

「ふん、女のことか。聞けてよかった。七尺の大男に生まれて国家に忠義を尽くすことを知らないどころか、女のところに行きたいとって逃亡するとは大したやつだ。中国男児の資格はないぞ。もしお前がすでに過ちを悟っていると知らなかったら、厳重に処罰しないわけにはいかなかった！」と、班長は冷たく皮肉まじりに言った。

「ありがとうございます、班長。ありがとうございます、班長！」

ほかの者も特赦を得たようにほっとして、深くためいきをついた。私は部屋の中で手に汗を握り、長い間緊張を強いられ、まるで自分が数十回叩かれたような苦痛を感じていた。

翌日、麻子は起きることができず、両手で絶えず尻をなでてうめいていた。聞くとところによると臀部が腫れあがっていたそうだ。王班長が私にヨードチンキを借りに来たとき、彼に聞いた。「どうしてそんなに厳しいんですか？」

彼は笑って言った。「すこし脅しておかないと、こんなに早くは自覚できなかったでしょうからね！」

「信じられませんね。便所の入り口にも見張り人がいたのに、どうやって逃げ出すことができたんですか？」

王班長も思わずハッハッと大笑いした。

「彼は糞をしに行っただけですよ。だれも大便の便所にまで付き添っていくことはできないでしょう！ あいつはその機会を見計らって壁を乗り越えたんです。だが運が悪

かった。街にいた中隊長に見られてすぐに発砲されて追いかけて、捕まえられた。あいつが鞭打ちの刑を受けるのはまちがっていますかね？」

私はまちがっているかどうか判断のしようがなかった。するとあの暴牙子が言った。「少しもまちがってはいません。銃殺刑にならなただけでも幸いでした。」

麻子はこれを聞いてにらむような目で彼を見たが何も言わなかった。あの、いつも沈んでいる若者は長い溜息をついた。それぞれがこの警告を自分の事として受けとり、だれも前者の轍を踏むことはなかった。誰が喜んで自分の体を傷つけるものか。

それ以来みんなはかなり落ち着いた。王班長はときどき率先して彼らと遊ぶようになった。子供のように、彼が猫になりほかの者たちがネズミになり地面を転がりまわった。猫はネズミを捕えられなかったが、ネズミに包囲されて楽しそうに笑った。

この鉄の仮面をかぶったような厳しい班長の心の優しさを、私は真から尊敬した。彼らは二週間後に訓練のため漢口(ハコウ)に行くということだった。近い将来、彼らは前線で民族解放のために戦う戦士となるのだ。私は彼らと付き合った日々の中で、この予備軍兵士の健児たちに心から感謝し、勇敢に戦い敵を倒し、勝利の旗を打ち立てることができるように、と励ました。そして暴牙子と、いつか私が前線に行って彼らを探し出すことがあったら、今と同じように彼らの医者と看護師になってやると約束した。

衛兵老爺

宜昌に滞在してちょうど十五日目の夜、県長の衛兵老爺(ラオイェ)①が来た。翌朝西に行く“民貴船”があるので、今夜乗船しなければならない。それですぐに切符を買わなければならない、と言うのだ。この知らせを聞いて私たちは喜んだ。急いで彼に尋ねた。「二枚でいくらですか？」

彼はためらうことなく答えた。「本当なら一枚 40 元、二枚で 80 元ですが、私が買いに行けば一割引で買えるから合計 72 元です。」

私はその数字を聞いて少しためらった。来たときの値段と比べることができなかったからだ。来たときは避難民用に割り当てられた船室だったので一銭も要らなかった。今回は自分で切符を買わなければならない。それでちょっと考えなければいけない。慌てふためくような事態がいつか起こるかもしれない。こう考えたとき、文姉さんも期せずして同じことを考えていたらしい。

「それじゃ大部屋にしようか？」

「大部屋の切符は買えませんでしたし、船室のほうをもう予約していました。」

しかたがない。大部屋が買えなくても行かないわけにはいかない。文姉さんと相談して房艙にすることを決めた。すぐに 75 元を彼に渡した。

①老爺……母方の祖父を指す場合と、「だんな様」という敬称として用いられる場合がある。以前は庶民が役人に対して、下僕が主人に対して使っていたが、現在では皮肉をこめて、あるいは風刺的にも用いられている。

しかし彼が立ち去ったあと、私はあることを思い出した。県役所に登録して切符を買うと八掛けで買える優遇が受けられると、以前友人から聞いたことがあるのだ。衛兵老爺は一割引だと言ったが、変更になったのだろうか？

ちょうど疑問に思っていたところに、彼が戻ってきた。顔を赤くしていた。何か重大なことが発生したようだ。ひょっとして切符が売り切れてしまったのではないかと私は驚いてしまった。この時、彼がポケットの中から切符と紙幣を取り出し、きまり悪そうに慌てて言った。

「腹が立ってしかたない。切符を買うところが混みあっていて、私が買う番になってお金を数えると五元少なくなっていたんです。七十元だけしかない。あせったけどどうしようもなくして何度も民生公司②に頼み込んでちょっと割引してもらい、六十四元にしてもらいました。六元のおつりです。五元を無くしたんで……」

彼が話し終わるのを待たずに私は急いで彼を慰めて言った。

「もういいですよ、大丈夫です。あなたが手伝ってくれたおかげで助かりました！」彼はやっと落ち着き、すぐに元気よく私たちの荷物をまとめて船までに運んでくれた。

②民生公司……1925年に重慶に創立された私企業で、長江の旅客航路と河川運輸を独占していた。一時期国有化されたが90年代以降民営化され業務を続けている。

出発間際、私は王班長と何人かの兵士たちに心から別れを告げた。みんなも名残惜しそうに私を見ていて、胸がいっぱいになり互いに何も言えなかった。ただ一人暴牙子が大きな声で言い聞かせるように言った。「前線で会いましょう。あなたを待っています！」

私はちょっとうなずいた。だが振りかえって彼らを見ることができなかった。再会できる日があるかどうか。「勇士たちよ！」私は心の中で言った。「あなたたちのために祈らせてください。後方で、私は謹んであなたたちの勝利の吉報を待っています。」

乗船すると私たちは自分の寝台を探した。“大豫”の船室とあまり違いはなかったが、扇風機が一台多かった。隣は機関室で床板は熱かった。衛兵老爺が立ち去ろうと

した。私は彼にはもう十分なことをしたと感じていた。チップがもらえないことは彼にもわかっていた。重慶にいる友人に航空便の速達で一通の手紙を出してもらうために、郵便料金の五角だけを渡した。彼はすぐに承諾して船を降りていった。

彼が行った後、私と文姉さんは彼のやり方について雑談した。彼はとても間抜けだ。切符に八掛けと明記してあったために不正行為をすることができず、かといってピンはねをする考えも捨てたくなく、別の方法を考えるしかなかった。それで、「五元を無くした」と嘘を言ったのだ。それを思うと腹立たしくもありおかしくもあった。道理で左手には大きな金の指輪をはめ、いつも“白金竜”や“大前門”^③といったタバコをくわえていたのだ。あの金持ち然としたなふるまい、「老爺」のような態度。彼は「国難の時に財を成す輩」だったのだ！

③白金竜も大前門も有名タバコの銘柄で、大前門は 100 年以上の歴史を持ち現在も生産、販売されている。

蜀道船上



重慶市奉節県の白帝城から下流域 193km の間に位置する瞿塘峡・巫峡・西陵峡は四川の三峡と呼ばれている。「蜀」は四川省の別称。

船上は息もできないほどの暑さで、部屋にいる人間の数は多すぎる。二人分の敷物に大人が三人、子供が一人、入口近くの一人分の敷物にも彼らの家族がいる。まだ避難船“大豫(ダーユー)^①”のほうがまだ。部屋の外に出てもずっと立っていられる場所もなく、船室に入って炙(あぶ)られているしかない。扇風機の風は少しも涼しくはなく、

長く風に当たっていると頭がぼうっとしてくる。ちょっと横になってみると下の方が上よりもましなように感じられた。上だと最後まで焼き上げられるほどだ。そのため文姉さんと昼夜交代で寝ることにした。彼女は昼間に寝たいというので、私が夜に寝ることにした。しかし寝ついてすぐに暑さで目が覚めた。全身汗びっしょりで服がぬれていた。文姉さんは扇風機を寝台に向けてくれたので、やっと少しくたた寝することができた。

① “大豫”は船の名前。“豫”は河南省の別称だが書面語として「喜ぶ、楽しい」という意味も含まれている。

夜が明けて、船がいかりを上げるとかなり気持ちが楽になった。文姉さんが休む番になったので、私は寝台わきにある扇風機の側にある長椅子に座り、老舎の長編小説『牛天賜伝』を読んだ。長江の景色はとても気に入ったが、船室を出て観賞することはできなかった。通路は押し合いへし合いで片足を挿し込むのがやっとなで、立ち止まっていられるような空間はなかった。文姉さんも寝入ることはできなかった。船室はとても騒がしくて、とぎれとぎれの睡眠を取ることはできなかった。

船の茶房たちはとても訓練されていて三度の食事もしっかりとしていて、料理も悪くなかった。“大豫”よりも清潔だった。しかし入口にいた同室の旅客の男は「衛生的ではない」と言って不満のようだった——それで自分で持ってきた大量のパンを食べ、レストランには行かなかった。特にひどかったのは、「トイレが汚れているのが嫌だ」という理由で、彼が部屋の中で用を足すことだった。それなのに衛生状態がどうのこうのと言うなんて、私と文姉さん往復びんたを食らわせたいと思うほど怒った。

この世にこんなにも恥知らずな人間がいるとは！彼は気取って鼻持ちならない男だった（彼の妻が言うには建築技師だということだった）。妻のほうは頑固なキリスト教徒で二人の少女は娘、妊婦は夫の知り合いだった。二人の男の子はレストランの簡易寝台票を持っていて、夜はレストランに行き眠り、昼間に家族全員がこの部屋に集まってぎゅうぎゅう詰めになっていたのだ。

妊婦はとても率直でおとなしくて、私と文姉さんは彼女とおしゃべりをするのが好きだった。彼女はあっけらかんと、自分がどんな人間であるか自己紹介をした。「字が読めない、針仕事ができない、家事の切り盛りができない。ただ麻雀をするのが大好きで、大人になってからはほとんどの時間が麻雀牌を握るのに費やされている。夫は電気器材の商売をしていてとても金持ちで、大卒で若くてハンサムだ。でも自分に

学がないことや自分が遊び好きなのを嫌っているわけではなく、自分のことが大好きで、家事もするし子供の面倒も見る。」

と、ここまで話すと、彼女は悔い改めているような顔をした。彼女の滑稽な口ぶりに私と文姉さんはたびたび笑いだした。彼女がとんでもない女だから笑ったのではなくて、その正直な態度をほほえましく思ったからだ。だれであれ自分は良い人間だと話すのは好きで、自分が良くないということを赤裸々には言わないものだ。彼女のように率直な性格を持っている人はほんとうに珍しい。

私はそれが一種の美德だと思った。あの技師夫人と比べるとまさしく逆だった。彼女はもっぱら自分がどのように有能であるかを吹聴し、自分には神さまのような「善行を施し、世を救済する」心があると言っている。いつも傲慢な態度で、見下すような目で妊婦を見ていた、私はそれが嫌いで、彼女にはわざとそっけない態度を取り、妊婦に親しく接した。

妊婦の腹には双子がいるということで、とても大きかった。三十歳ぐらいだったろうか、美人だが歯が少し出ている。ぼさぼさとした髪の毛、化粧をするのが好きではないようで衣服も質素だ。技師夫人のような洋装でもなく皮靴を履いているわけでもないが、彼女の夫はこの自然で質素な彼女が好きなのだろうと思った。

その日の晩、船は巴東に停泊した。茶房は、出発は明日で今夜はここで泊まる説明した。そこで私と文姉さんは岸に上ることにした。

数十段の石段を登ってやっと町に入った。町は山上にあり通りは狭かった。家は人の背の高さと同じほど低く、上海の宝山区（上海の北部、長江沿いにある地区）の景色に少し似ていた。路地を二つ過ぎ、三、四か所の斜面を登っていくと滝が見えた。透き通った水が山から急流となって落ち、ごうごうとした音が衣服を叩く音と合わさり、人を引き付けるメロディーを作り出していた。

私たちは岩の上に座り、足を水の中に入れた。冷気が心の底に浸透してきた。口で表せないほど心地よくて、死ぬまでずっとここにいたいものだと思った。遠くの山の中腹にはいろいろな形をした家があり、山肌には段々畑の耕作地があった。下を長江が流れ、船がひっきりなしに揺れながら行き交っていた。漁師たちが岸辺で網を手にして支え合っている。この静かで優美な景色、厳かな雰囲気はまさに桃源郷だ！

私はぶらぶら歩きながら船に帰りたくないなと思っていた。突然空もようが変化した。またたく間に雷鳴が轟き稲光が光り、夕日が黒雲に覆い隠され、いまにも雨が襲ってきそうだった。洗濯をしていた女たちは慌ててあわてて洗濯物を運んでいた。私と文姉さんも慌てて山を下った。

でこぼこした石の谷川を通過して何度か転びそうになった。はだしの農婦たちが口をすぼめて私を見て笑った。私は急いで木の枝をつかんで体を支えた。恥ずかしかった！彼女たちの目の前では、私は本当にちっぽけな存在に過ぎなかった。船に戻り十五分も経たないころ雨が降りはじめた。しかしそれで少しは涼しくなったというわけでもなかった。

夜、私と文姉さんは雨の中で涼もうと岸に上がった。

翌日の早朝、船はいかりを上げた。私はあの山の街をながめていた。あの滝、あの健康な農婦たち……。旅客たちはまだ眠っていた。船の先頭に立って朝の長江の景色を観賞した。たびたび船は、二つの峡谷が迫って通り道のない所に入っていきようだったが、しばらくすると突き抜けて出ていった。これが四川の三峡^②で、杭州の九溪十八澗^②を思い出した。山の斜面には何人かの裸の男たちが見えた。彼らはほとんど原始の時代と変わらぬ生活をしているようだった。

雨はすでに止んでいた。空は晴れ、朝日がゆっくりと山の下から昇ってきた。高く突き出た山を仰ぎ見ると、実に不思議な光景があった。綿の実のような白い雲が、緑鮮やかな山の峰をいくつかの塊になってとり囲み、山の中腹を隠し、飄々と空を漂っていた。これはまさに、平地に住む人間がめったに見ることのできない光景だ。正午ごろ太陽が霧を突き抜けて姿を現わし、大地を熱く焦がして水分を蒸発させ、人間は窒息してしまいそうだった。あわれな小さい扇風機は休みなく働いていたが、私の全身からはまたひたすら汗が流れはじめた。

^②九溪十八澗……西湖の西方に位置する山々の中を、曲がりくねって銭塘江（杭州湾に注ぐ）まで流れている川の流域。

